

ちよつとした事が、人生を変える。

十五年程前、まだ飲食店で働いていた頃、休日に行きつけの床屋さんへ行きました。その日はすでに待っている人が二人いて、僕の後から来た人はちらつと覗くなり帰ってしまふ程の混みようでした。

そんな中、一本の電話があつて、どうやら予約をしたいみたい。「今、混んでるけど、あと三時間後位ならいいと思うけど、うん、そう、じゃあ、待ってるね。」お客さんと云つても何やら親しげな様子。

自分の番になって、さっきの電話の健をマスターに聞いてみると、常連さんだけど、なんと松川村！から来てくれる、との事。一体どれだけ時間がかかるんだろう？ここまで来る間に、何軒もの床屋さんの前を通り過ぎて来るハズ。これって、すごい事じゃない、と妙に感動した事を今でも覚えています。

「僕も、わざわざ来なくなる様なお店を持ちたい」この時の一本の電話が、勤めていた飲食店から独立をするきっかけとなったのです。

きっかけなんて、きつどこにでもころがっているものなのでしょうね。

カフェ・シネトラツセ (児玉理) <http://kaffee-strasze.blog.ocn.ne.jp/>



### これからとお知らせ

☆朝日村にギャラリースペースを作ります！！

朝日村にギャラリースペースを作る企画が進行中です。ギャラリーの名称は「TOU(問う)」。TOUで行われる展示やイベント、その全ての価値や評価を見る人に問う場所です。どん詰まりの朝日村、田舎だからできる事をしていきたいと思っています。詳細は近日発表。2013年夏のオープンを目指して色々やっていきます。お楽しみに！（下田ひかり）

### 3号目です。

夜のさんぽは、長野県朝日村の創っている人が作っているフリーペーパーです。

先月号のこちらのコーナー、文章が途中で切れていました。「今まであまり繋がる事のなかった人たちが繋がる楽しさを実感しています。」が本来の文章でした。生真面目な顔をして、いつも肝心な所で少し抜けています。しかし今年は春が遅いですね。春が来るといきなり一年が動き出す感じがします。生き物も人間も、慌ただしくなつて、気持ちが焦るので、ちよつと春が苦手です。

来月号もお楽しみに。(感想お待ちしています)

### 今月のはんこ



 [hankoya.noraneko@gmail.com](mailto:hankoya.noraneko@gmail.com)

朝日村つくりびとのブログも見てみてくださいね！  
<http://asahinobijyutsukan.blog136.fc2.com/>  
夜のさんぽのバックナンバーもこちらから読めます！

# 夜のさんぽ

朝日村の創っている人が作っているフリーペーパー

2012年 4月号(vol.3)

このフリーペーパーを創っているひとたち  
藤牧 敬三 (クラフト) / 下田ひかり (現代美術) / 児玉 理 (自家焙煎珈琲) / やざきなおみ (消しゴムはんこ)  
表紙の写真 / 百頭たけし (web 写真家) HP 山ヲ煮ル・・・ <http://d.hatena.ne.jp/hyakutou/>

職人として……。

僕が木工の世界に入るきっかけは、22歳の時に松本市日の出町にある松本民藝家具の作業場を見学し直視的にこの仕事为天職と感じたことが大きな動機です。

それ以前は当時、諏訪精工舎(現セイコーエブソン)に高卒で入社し腕時計に関わる仕事に5年間従事していましたが、日々のデスクワークや会議などでのプレゼンテーションがとて苦手で、仕事について悩んでいる時に家具製作の仕事に出会いました。祖父も父も建具の木工職人でしたのでこの転職は一見、自然の流れのようですが、当時のバブル期に職人の世界に飛び込む人はほとんどなく周囲からは留まるよう説得されました。

松本民藝家具では最初の3か月は親方の手伝いをしながら仕事の流れを覚え4ヶ月目からは自分一人での作品を作り出す実践的な習得方法でした。親方も自身の制作があるので、見て聞いて覚える式のやり方はプロの現場ならではだと思います。

時計においても同じで時計修理の技能オリンピック経験時に時計修理・調整の名工、小池健一さん(内橋克人著・匠の時代に登場する時計修理・調整のスペシャリスト)の指導のもと技術・技能の訓練を2年間受けました。数十年かけて確立してきたノウハウを5年足らずで実践し競技会でメダルを取ることが使命ですので、指導者も我々訓練生も結果を出すことに必死でした。時計の詳細な専門的スキルはほとんど忘れてしまいましたが、失敗したり欠陥がたり理想通りに行かないには必ず原因があり、その原因を突き止め改善・修正していけば必ず問題は解決できる、という信念を叩き込まれ、それを実践・体感できたことは大きな財産になっていますし、今から思えば時計修理を通じて、モノづくりの礎になる感覚を身に着けられたように思います。

木工の仕事を始めて今年で2年目になりますが、モノづくりにもさまざまな考え方や価値観があり、アートの分野のように想いを表現する手段であり、人のやっていない新しいことを生み出すことが目的という考え方もあるし、あ

る人はライフスタイルの一環としての(趣味と仕事同居している)モノづくりをするという考え方。または好奇心や好きが高じて作家になっている人も多くいます。僕の場合その中のどれでもなく、高校を卒業してからブランドなく常に生業としてモノづくりにはたずさわり、たまたま縁あり家具を造る木工の仕事に就いて、人に必要とされる家具や木工品をいま日々淡々と制作しています。時々他者と比べて自分が迷っている時もあります。ビジネス的にはアーティストや家具作家として自身を位置づければ絵図らとして良いとは思いますが、僕自身の歩みや精神的内面は木工職人でありモノづくりが自己表現の手段でもありません。自分の手と感覚から生みだされる木の生活道具が丈夫で美しく使う方が喜んでくればそれで良くて、またそれが生業になれば幸せと感じています。僕自身の持っている経験・感覚は唯一無二だろうし制作過程の副産物として、自分らしさが作品から見え隠れすれば、それはそれで静かで押しつけではない独特な魅力だと思っています。

デザインのことで考え込んだり、経営的な部分で迷ったり悩みは多いですが、その時その時、ベストを尽くせばそれが正解と信じて、引き続き精進したいと思っています。

今回もついつい内面的な話になっていきました。次回は制作のディテールのことなどは是非、書いてみたいと思っています。

(藤牧敬三)

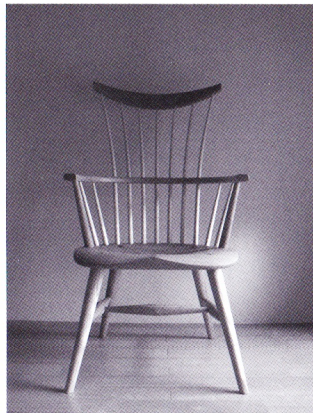
スタイル・ガレ <http://www.stylegalle.com/>

描いても描いても絵にならない  
絵は、どうやって絵になるのだろうか。

描いていると、自然と「これ以上手を入れられないポイント」に来る事がある。ある一定のクオリティを越えると、「今の自分の感覚でいうと、今この状態が一番おもしろい」となる時があつて、判断を間違わなければ、そこで完成になる。

絵を描いているときに大抵悩むのが、「この絵はどうなりたいのだろう」という所で、絵を眺めながらこの絵の行く末を考え、一週間近く手を入れられない事もザラにある。「もしかしらこの部分はこのまま何もしない事が正解ではないか」「ここはこうした方がいい」「この脳内の足し算と引き算は、自分の美的感覚をきた人生のあらゆる感覚全てを総動員する作業で、絵を描くというのは考えるのはおまけみたいなものじゃないか」としよつちゅう思う。

絵はただ描けば絵になるわけではなくて、絵をかみ砕いて消化する期間を経て絵になると感じている。実際に描く前の準備段階、描いている制作段階、描いている絵がどういふものか見極める段階、この全ての段階で、絵をかみ砕き、段々と消化する。



描く前は気持ち盛り上がりつつも描いてみたらどうも違っていたとか、制作までは良かったけど「この絵は一体どういふものか」が見極めがつかずに完成できず、放置してしまうものもある。そういう時は大抵、準備が足りなかつたり、消化不良だつたりする。

「この絵はもっと良くなるはずなのに、その方法を見いだせない」という自分の力不足に嫌気がさし、才能の無さに絶望し、身投げする勢いでモヤモヤする。大抵その絵の事しか考えられなくなる。

不思議なもので、少し期間をおいて冷静になって見つめ直してみると、ふっと打開策が見えたりする。そういう時は描いていて本当に楽しい。

絵が絵になる為に必要な準備も消化も、今まで自分が蓄えてきたものでしかできない。だから、世の中のあらゆるものを面白がって見て、自分の中に蓄えていきたいと思います。